あいさつの本当の意味

良いチームには、良い習慣があります。
真っ先に習慣化したい筆頭は、返事と挨拶です。
あとは、「後始末」です。
この 3 つは「しつけ三原則」とも呼ばれ、これらが徹底できれば他のしつけは自ずと身についてくれると言われています。（Venture fourth 第 12 号「しつけ三原則」）
4 月の初日から、少しずつステップアップする形で挨拶の手本を示してきました。
それは、

① 相手の名前を読んで、 ② さわやかな笑顔で、 ③ 自分から先に、

挨拶をする、というものです。
現在、教室には見違えるほどの挨拶がこだまするようになりました。
ちなみに、「たくさんの人にあいさつしようね」「自分から先に挨拶するのが大切だよ」「何人の人に挨拶できるかな」などと声をかけていけば、どの教室でも一時的には挨拶が活性化します。
しかし、それらは一過性のものとなることがほとんどです。
習慣化されていない一時的な動きは、時間がたてば薄れやがて消えていきます。
これは、どの学校でもどの学級でも往々に見られる現象です。
多くの学校で、「挨拶運動」が行われているにもかかわらず、中々定着して

いかないのも同じ現象です。
　一体それはなぜなのか。
　数年前に学校外の場所でお話させてもらう機会があったため、考えをまとめたことがありました。
　端的に言えば、挨拶が多くの子どもに広がっていかない大きな理由は、「趣意」が伝わっていないからではないかと考えています。
　なぜ挨拶をする必要があるのか。
　そこには一体どんな意味があるのか。
　納得していないから、人は動かないのだと思います。

　以前見たテレビで、ベテランのサラリーマンが嘆いている場面が映し出されていました。
　「最近の若者は、挨拶をしない！」と、いたくご立腹です。
　それに対して、実際に「普段から挨拶はしない」とさらりと答えた若手サラリーマンたちが、その理由を次のように答えていました。
　「だって、挨拶をしても意味ないじゃないですか。」
　「いちいち挨拶をしてたら時間がもったいないです。」
　その映像を見た時は、私は変に納得してしまいました。
　なるほどこの人たちは、挨拶の「意味」が伝わっていないから、挨拶をしないのだ。
　そのように、感じたからです。
　裏を返せば、挨拶に込められた意味が理解し、心から納得できれば、「時間がもったいない」とは考えなくなるだろうなぁと思いました。
　これは、サラリーマンだけの話ではなく、学校においてもある程度共通性があるだろうと思っています。

挨拶はなぜ大切なのか。その意味は一体何か。

　ここをきちんと語れるか否かが、重要なポイントだろうと思います。
　では、上の問いにみんなはどのように答えるでしょうか。
　人と人とのつながり・・・
　コミニュケーションの基本・・・
　色々と答えは出てきそうですが、確たる理由について多くの人が答えられないのではないかと思います。
　私も、そうでした。

この時、ちゃんと自分自身が挨拶の意味を調べて子どもたちにその大切さを得心させられるような話をしないといけないなぁと感じたのです。
答えられないのは、教わっていないからだと思ったからです。
担任ですらちゃんと答えられないのですから、子どもたちから明確な答えが出てくるわけもありません。
そこで、その日の内に調べることにしました。
書架から挨拶に関連する書籍を片っ端から取り出し、読みました。
けれど、どれをとっても明確な答えが出てきません。
ただ、あるホテルマンの書いた本に、「語源」が載っていました。
語源とは、その言葉がどのようにできてきたかという由来のお話です。

・「挨拶」の語源を紐解いてみると、禅宗で問答を交わして相手の悟りの深浅を試すことを「一挨一拶」という、その言葉に由来します。「挨」には「押し開く」「互いに心を開いて近づく」、「拶」には「迫る」「擦り寄る」といった意味があります。
・「出会った人が互いに心を開いて相手に迫っていく」ということが挨拶とされています。

どうやら、「互いに心を開いて近づく」という意味が、挨拶という言葉にはあるようです。
ただし、これだけでも子どもたちの心には届かないと思いました。
「こういう意味だから、挨拶は大切なんだね」と伝えても、「そうなのか」となるだけで、大きな考えの変革には至らないと感じたからです。
「〜〜をしようね。」「〜〜は大切だよ。」
こうした指示や語りは、ある一定の年齢までは素直に聞くことができます。
しかし、思春期が近づき自我が確立されてくると、そうはいきません。
「右向け右」と聞いて、今までなら素直に聞けていたものが、「なぜ右を向かねばならないのか」と考え始めるようにもなるからです。
この時、「いいからやりなさい！」と断固としてやらせる場合もあることと思います。
ただし、私は学校ではそれをできるだけしたくないと思っています。
理由は簡単です。私自身が子どもの頃、大人から同じように言われた時、まるでやる気が起きなかったからです。

世界的大ベストセラー、『人を動かす』（Ｄ・カーネギー著　創元社 1999 年）にも次のように書いてあります。

人を動かす秘訣はこの世にただ一つしかない。 自ら動きたくなる気持ちを起こさせること―これが秘訣だ。

「何だか分からないがやる」という状態は、「考え」も「理解」も不安定であり、この状態に慣れると、「何も考えなくても行動さえしていればいい」と、不安定な状態をそのまま受け入れるようになってしまいます。

つまり、知性的な状態からどんどん離れていくことになります。

一方通行の言い方で動かすのではなく、自分でやっていることに自分で納得して取り組めるようにしたいと考えています。

挨拶について「得心」して行動や考えを変えていくためには、もう一歩突っ込んだところまで調べる必要があると判断しました。

そこでなおも調べ続けました。そして、面白い説を発見しました。

「挨拶の言葉自体には何の意味もない」という話です。

これは、ある小学校の先生が書いているお話です。

少し長いですが、そのまま紹介します。

『人と出会って、“あいさつ”をする時、「こんにちは」と言います。その後、「どちらへ？」と尋ねると、「ちょっとそこまで…。」と答えます。「それは、それは、結構ですね。」となって、この会話は終わります。この会話には何一つ意味はございません。

また、「こんにちは」という言葉一つをとっても、不思議な言葉です。「こんにちは」がどうしたというのでしょう。「“今日は”　結構なお天気でございます。おかげで農作業もはかどります。」等と言い合うのであれば意味も通じるのですが、「こんにちは」だけなのです。何もわからないのですが、それでいいのです。

つまり、“あいさつ”はそれ自体に意味をなす言葉なのではなくて、お互い安心するための符丁だからです。

犬でも、猫でも、猿でも、どんな動物も怒っている時は、表情や態度に表します。「ウーッ」と言って牙をむき出しにしています。それは威嚇している時もあるかも知れませんが、少なくとも、機嫌がよくないことを相手に示しています。その様子を見て、「あー、機嫌が悪そうだな。怒っていそうだな。」と感じ、不用意に近づかない方がよいと判断できます。

ところが、人間という動物だけは、ニコニコと笑顔ですれちがっても、後

ろに回っていきなり、「ゴンッ」と人をどつけるのです。人間は自分の周りに見せる表情と実際の心の有り様を違えることができる唯一の動物なんですね。そこで、“あいさつ”を交わすという、ことが発明されたのです。“あいさつ”をすることで、「少なくとも、あなたの敵ではありませんよ。」と伝えているのです。ですから、その意味からは「おはようございます」とか「こんにちは」とかはっきり言う必要もないのです。「よっ」でも「おぅ」でもいいのです。お互いがわかり合う合図なのですから…。』

私にとっては、上の話は目から鱗でした。

若手サラリーマンの言う通り、挨拶の言葉自体には特に意味があるわけではないのです。

では、挨拶を交わすという「行為」にはどのような意味があるのか。

この点をしっかり伝えることができれば、子どもたちに挨拶の大切さが伝わるように思いました。

そこで、次の話を紹介することにしています。

大昔のこと、人間が、他の動物と同じような生活をしていた頃、小屋なども作れず、洞窟や大きな木の陰に住んでいました。食べ物も、近くに落ちている木の実や果実や虫を食べていたと思います。海や川のそばなら魚や貝も食べていたでしょう。そして、何日かに一度くらいはウサギやシカなどの大きな生き物のお肉も食べていたと思います。それは、それは、ごちそうでした。

その時代の人間が群れで生活していたかはわかりませんが、野性の動物の過し方から想像しても、少なくとも、お父さんお母さん子どもという家族はいたと思います。洞窟の中でお母さんが子どもを守り、お父さんが食べ物を探しに出ていたのでしょう。

春から秋にかけては食べ物が豊富にあり、その取り合いで争いもなかったかもしれませんが、冬場や、日照りや洪水など食べ物が少なくなった時には、殺しあいになるほどの奪い合いになることもありました。苦労して手に入れたウサギやシカなどのお肉は、家族のために必死で持って帰ろうとしたと思います。

自分のすみかに持って帰ろうとする途中で、見知らぬ人とすれ違った時に、せっかくの獲物（大切な食事）を取られてしまったかも知れません。何度かそんな目に遭わされるうちに、周りを警戒することにヘトヘトになってしまったのではないでしょうか。

そこで、自分の家族や親戚など、近い仲間で暮らすようになり、仲間内での合図

が“ あいさつ ” になっていったのだと思います。「私はあなたの敵ではありませんよ。」「あなたのものを取りませんよ。」という意味が込められたのだと思います。
“ あいさつ ” は、人間に野性がまだまだたくさん残っていた頃の周囲への恐怖心や警戒心を解きほぐしてくれるのです。
そう考えれば、“ あいさつ ” をすると、気持ちよくなるのがわかります。安心できるからです。初めて会った人や、その日に初めて顔を合わせた人に“ あいさつ ” をすると、相手の人は安心することができるのです。

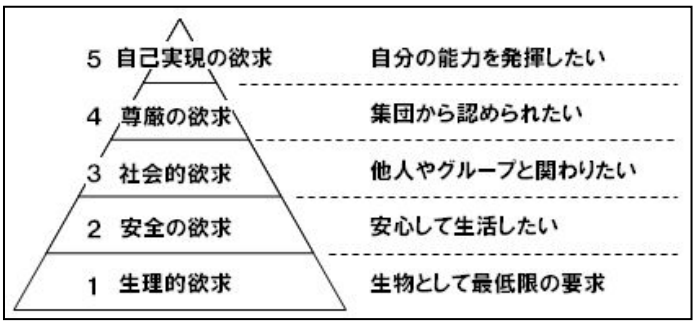
「安心」という一つのキーワードが浮かんできました。
この路線で調べ物を続けると、さらに面白い話を見つかります。
調べ物をする中で浮かんだキーワードを参考に次の 2 冊の本を買いました。
『翻訳できない世界の言葉』と『外国語には訳せない美しい日本の言葉』です。
この中には、他の言語に訳せない様々な言語の言葉が載っていました。
例えば、有名な所で日本語の「もったいない」があります。
環境分野で初のノーベル平和賞を受賞した、ケニア人ワンガリーマータイさんによって、この言葉が世界中に広められました。
他の言葉には、どうしても訳せないニュアンスなのだそうです。（環境活動家の方々は、「環境３Ｒ＋Ｒ（リスペクト）」が「もったいない」の意味であると説明しています。）

さて、『世界中には日本語や英語、フランス語、ドイツ語など色々な国の国語や公用語だけでも、100 近い言語があります。
その中には、上の様にどうしても他の言語に訳せない言葉があります。
しかし一方で、不思議な事にどの言語にも共通して存在する言葉があります。
それが、“ あいさつ ” です。
日本語での「こんにちは」という“ あいさつ ” 。
英語では「Hello」「Good afternoon」。
中国語では「你好」。
スペイン語では「Hola」や「Buenas tardes」。
フランス語では「Bonjour」。
と、それぞれの言葉の数だけ“ あいさつ ” の言葉があります。
それはきっと、自分たちの命をつないでいくために必要な言葉だったからだと思うのです。

そのキーワードが、「安心」だったに他なりません。
もう一つ。
教室では次の事も伝えることにしました。

さらに、この“あいさつ”をニコニコの爽やかな笑顔でできたならば、「敵ではありませんよ。」という意味だけでなく、「あなたの味方ですよ。」「大好きですよ。」という意味さえ加わると言われています。
そうなると、安心感だけでなく、相手は「認められた」という幸せな気持ちさえ感じられるのです。

この「認められた」という感覚は、すごい力を秘めています。
人間が「何かをしたい」と思う力、モチベーション。
これは、５ つの段から成るピラミッドのようになっていると、かの有名な心理学者が提唱しています。
このモチベーションは、下から順に満たされることで、徐々に上の段階へと進んでいきます。
最初は、「寝たい」「食べたい」などの、生き物としての命をつなぐ基本的な欲求。
次は、安心して生活したいという、「安心安全」の欲求。
このようにつながっていって、上から二番目が「集団から認められたい」という尊厳のモチベーションです。
ここが満たされて初めて、次の「自己実現」へとつながっていきます。
自己実現とはつまり、自分の力を存分に発揮し、なりたい自分になるという夢をつかむ力です。
つまり！
いい挨拶を交わせている集団は、夢をつかみやすくなるのです。
挨拶一つで、周りの人を安心させ、夢をつかむチームを作っていくことが可能です。



と、このように教室では伝えました。

☆↓読者ページはこちらから↓☆ご意見ご感想など気軽にお寄せください

https://docs.google.com/forms/d/1qqf4cPLcjpcWaimWdu-6lFM73JahODYK4ROldg7jLxM/edit